



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬
●事務局長 吉高 叶 (栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

小峯 茂嗣

こみねしげつく

NGOアフリカ平和再建委員会事務局長

ルワンダという縁 — 佐々木さんと私

1997年、私はルワンダに2ヶ月滞在していました。NGO「アフリカ平和再建委員会(ARC)」のスタッフとして、虐殺から3年後の社会状況や、現地NGOの活動状況の調査を行うことが目的でした。この前年から、隣国ザイール(現・コンゴ民主共和国)で内戦が勃発し、そこに逃れていた多くのルワンダ難民が本国への帰還を始めた頃でした。

ところでARCの「R」はReconciliation(和解)の頭文字です。1994年の設立時、紛争後の平和構築について「和解」という角度から取り組んでいこうという思いがこめられています。しかし97年当時、ルワンダのNGOスタッフには「みんな家も仕事も食べ物もないのに和解なんて言っていられない」と言われ、ルワンダ人の友人と虐殺追悼施設(虐殺時のご遺体がそのままの状態「保存」されていた)を訪問した時は「これを見た遺族に和解しろなんて言えるかい?」とも言われた時、何も言葉にできませんでした。和解とは大切に尊いことである反面、そこにいたるまでの壁の高さ、厚さを痛感しました。

日本に帰国して数年後、ARCの事務所で佐々木和之さんとお会いしました。もう10年前のことになります。その後の佐々木さんのルワンダでの研究や活動については、みなさんがご存知のとおりです。

私はといいますと、その後はルワンダに長期滞在することはなくなり、ARCのルワンダ駐在員を日本国内からバックアップし、時々短期でルワンダを訪問するくらいでした。また大学教員として大学生をルワンダに連れて行くプログラムを行ったりしていました。この頃にはすでにルワンダに拠点を築きつつあった佐々木さんにもお世話になりました。いろいろな苦労はあると思いますが、現地に張り付いて活動されている佐々木さんご家族の皆さんをうらやましく思うこともあります。

一方で、ここ数年、多くの日本人をルワンダという国に、また佐々木さんの活動につなげていくことができました。ルワンダについて学びたい、取材したいという問い合わせが、私のところにはよくあります。そういった問い合わせの一つが、NHKのドキュメンタリー「“償い”と

“赦し”の家造り」という形で結実し、日本の人たちに今のルワンダと佐々木さんの活動を紹介することができたのは、私にとって大きな喜びです。

初めてルワンダに行って13年たちますが、「ルワンダ」というものにまつわり様々な縁が結びつきあって、そしてそれがさらに広がっていくことの不思議さと

面白さを感じています。

アフリカ平和再建委員会 (ARC)

<http://www.arc-japan.org>

日本ルワンダ学生会議

<http://jp-rw.jimdo.com/>

佐々木和之

ささきかずゆき

癒しから和解へ

「加害者たちによる家造り」。それは人間の根源的なニーズと関わる取り組みなのかもしれません。「尊厳の回復」という根源的な・・・。

■ルワンダからムラーホ！

ムラーホ！今号が皆様のお手元に届く頃は、ワールドカップが終幕を迎えていることでしょう。今回はアフリカ大陸初の大会ということで、こちらでもとても盛り上がっています。アフリカのチームでは唯一ベスト8に残ったガーナがどこまで勝ち進むのか？日本の快進撃はどこまで続くのか？職場の内外でサッカー談義に花が咲いています。思えば、私がアフリカでワールドカップを見るのは5回目になります。最初は20年前のエチオピア。場所は田舎町のバーでした。座席を全部取っ払い、皆が体操座りで肩寄せ合って、快進撃を続けるカメルーンを応援しました。サッカーは世界の共通語。ルワンダでもそのことを再確認しています。

■石けん造りに励む女性たち

4月から東部県グゲセラ郡のニヤマタで、女性グループによる石けん造りプロジェクトが始まりました！ニヤマタは、キガリの南方約30キロ、車で約30分のところにある地方都市で、虐殺が特に激しかったことで知られています。実は、今から10年前、私が初めて虐殺の現場を訪

ね、大きな衝撃を受けたのもこのニヤマタでした。プロジェクトの参加者は、REACHが2年前から実施してきた「癒しと和解のセミナー」の受講者で、虐殺により夫を無くした女性たちと、虐殺に関与した罪で刑務所に入っているか、刑期を終えた夫を持つ女性たち、計51名です。

数種類の原料をよく攪拌するための石けん製造器は、アメリカの支援グループの援助により購入しました。女性たちは3つのグループに分かれ、週に2日ずつ働きます。1ヶ月に棒状の細長い石けん（販売価格500フラン、日本円で約80円）が約2千個（日本の石けんに換算すると約8千個）造れ、材料費等を差し引くと約50万フラン（約8万円）の収益が得られる計算です。参加している人数が多いため、1人当たりの収入は月1万フラン（約1600円）に過ぎませんが、現金収入のほとんどない女性たちにとっては貴重な収入源です。

女性グループのリーダーのレニアさんは、「さらに講習を受けて、もっと質の良い石けんを造れるようになりたい」、「しばらくしたら、この事業で得た収益を使って、ろうけつ染めのプロジェクト

を始めたい」などの豊富を語ってくれました。メンバーの1人であるオノリーネさんは、プロジェクトを初めて良かったこととして、一緒に祈ったり、困っていることを相談しあったりと、女性たちの結束が強まったことを話してくれました。彼女たちの活動が少しずつ広がっていくようにお祈りください！



■「償いのプロジェクト」第2期がスタート！

本誌14号と15号にて、REACHが関係を保ってきた元受刑者たちが、ボランティアとして被害者のために家造りを始めたことをお伝えしました。REACHは、ジェノサイド16周年を迎えた4月、この元受刑者たちによる継続的な償いの取り組みを後押しし、「修復的正義による和解」のプロセスをさらに前進させるために、「償いのプロジェクト」第2期を開始しました。今後約10ヶ月間、日本の皆様からのご支援金計360万円を用いさせて頂き、以下の課題に取り組んでいくことになりました。

- ①元受刑者が結成したグループによる「償いの家造り」（新規の住宅建設7軒と改築5軒、計12軒の建設・改築）に必要な建設資材を支給すると共に大工1名を派遣する。
- ②劣悪な居住環境に置かれている元受刑者の世帯に対しても建設資材（屋根用のトタン板）を支給する。計10家族への支給を計画。
- ③家庭訪問等を通し、家造りの受益者である虐殺生存被害者（genocide survivor）と家造りに参加する元受刑者に対する

心のケアを継続する。

④両者がお互いの体験や思いを分かちあうための対話集会を開催する。

昨年まで実施していたプロジェクトとの違いは、まず第一に、家造りが労働奉仕刑の受刑者によってではなく、既に刑期を終えて故郷の村に帰還した元受刑者たちによってなされるということです。

「自由の身」になりながらも出来る限りの償いを続けていこうという彼らの取り組みは、各集落の虐殺生存被害者たちから好意的に見られており、「修復的正義による和解」の実現に向け、とても重要な一歩になります。次に第二の違いは、元受刑者の世帯への支援をプロジェクトの活動の一つに組み入れたことです。実施地域に住む元受刑者の世帯の中で、劣悪な居住環境に置かれている世帯に対し、屋根として用いるトタン板を支給します。以前であれば、地元の虐殺生存被害者たちから「なぜ加害者側の人たちに支援するのか？」という反発の声が上がることは必至でした。しかし私は、これまでの元受刑者たちの償いの取り組みにより、虐殺生存被害者たちの意見が変わってきたと感じています。今後、さらに元受刑者による「償いの家造り」が成果を上げ、虐殺生存被害者たちの理解を十分得られるようになってから、トタン板の支給を開始したいと思います。



【ボランティアの家造りを呼びかけたタデヨさんと】

6月15日現在、3つの集落で計32名の元受刑者たちが計6軒の住宅建設・改築

に取り組んでいます。それぞれの現場で土台作りは既に完了し、これから日干し煉瓦を積み上げる作業に移っていきます。今後とも応援をよろしくお願い致します。

■心からの償いを求めるサベリアナさん

私がサベリアナさんと出会ったのは、今から約4ヶ月前のことです。元受刑者たちによる家造りボランティアを最初に申し出たタデヨさん(14号参照)が、私を彼女の家に連れて行ってくれました。今から約16年前の1994年、彼女が31歳の時にジェノサイドが起こり、両親や兄弟姉妹を失いました。彼女自身は山刀で体中を斬りつけられ、意識を失いながらも奇跡的に助かったのです。それ以降、彼女は4人の孤児を引き取り、彼らと一緒に粗末な小屋に暮らしてきました。タデヨさんと元受刑者の仲間たちは、刑期が終わって自分たちの村に戻った後、サベリアナさんの家が崩れかかっているのを見て、それを建て替えてあげたいと考えました。しかし、材料費を負担する余裕が無く、REACHに支援を求めたのです。

2月中旬、タデヨさんの案内で、丘の中腹にあるサベリアナさんの自宅を訪ねました。彼女と挨拶を交わしながら、私は、彼女の顔面、右目の下から顎にかけて延びている深い傷跡にまずショックを受けました。そしてその後すぐ、彼女と握手を交わした時、再びハッとしました。彼女の右手の指が数本欠けていることに気づいたからです。挨拶の後、彼女は、私とREACHのオーグスティンさんに小屋から出してきた長いすに座るように勧めました。それから彼女は、私たちの前にゴザを敷いて腰を下ろすと、タデヨさんも彼女の隣に腰を下ろしました。

私の目の前で2人が隣り合わせで座っていることは、紛れもない事実でした。しかし、その事実を頭では理解しながらも、心で受けとめられないのです。タデヨさんは16年前、このルガンド村で、ツチの家族を次々と襲撃したフツの村人

たちのリーダー格の1人でした。そればかりか、住居建設への参加を申し出ている10人ほどの元受刑者の中には、サベリアナさんの襲撃に直接加わり、彼女を山刀で斬り付けた者たちもいるとのことでした。肉親を殺され、自らも九死に一生を得たサベリアナさんが、加害者の1人であるタデヨさんと自然に言葉を交わしているという「奇蹟」を目の当たりにし、私は戸惑ったのです。

私は、率直に彼女にこのように尋ねました。「本当に彼らに家を建ててもらえることが良いことなのですか？あなたが望むなら、私が大工仕事の上手な友人たちと一緒にやってきて建ててあげますよ。」すると彼女は、タデヨさんの方に目をやってから、静かに、しかし、きっぱりとこう言いました。「この人たちに建ててもらいたいのです。この人たちが、私を傷つけたのですから。」

一般的に言って、自分や家族を傷つけた加害者の顔など見たくもない、といった被害者の心情の方が分かりやすいのではないのでしょうか。しかし、サベリアナさんをはじめ、ルワンダで私が出会ってきた人々の多くが、「誰でも良いからとにかく家を」ではなく、「加害者たちによる家造り」を願っているのです。そしてその家造りとは、加害者による心からの償いとしての家造りなのです。

それでは、彼・彼女たちはなぜ加害者による償いをそれほどまでに求めるのでしょうか？私はルワンダで働く中で、それは人間の根源的なニーズと関わるものだからなのだと考えるようになりました。そして、その根源的なニーズとは、「尊厳の回復」と言い換えることができるかもしれません。サベリアナさんを山刀で斬り付けた者たちは、その暴力行為によって彼女の人間性を否定し、尊厳を踏みじりました。彼女が加害者たちによって奪われた尊厳の回復のために、加害者たちによる償いがとても重要な意味を持っているのです。



【サベリアナさんと4人の子どもたち】

■癒しから和解へ

タデヨさんらによる家造りが始まってから2週間後、サベリアナさんを訪ねました。その日、作業は休みでしたが、すっかり家の土台ができあがっていました。にこやかに出迎えてくれたサベリアナさんに、「今年のジェノサイド記念期間は、昨年までと比べてどうですか？」と尋ねました。すると彼女は、「去年までは悲しい気持ちを誰ともシェアすることができませんでした。家の中に閉じこもり、暗い気持ちで過ごすことが多かったです。でも今年は、皆さんがこのようにして訪ねてくれること、受刑者であった彼らが家造りを始めてくれたことに励まされています。それらひとつひとつに神の愛を感じ、強められています。」と答えたのでした。

以前私は、サベリアナさんに「何があなたをそんなに強くしているのですか？」と尋ねたことがあります。それに対する彼女の答えは、「それは、神に祈ることでしょうか。祈りの中で、私は平安を得るのです」というシンプルなものでした。そして、1週間に何度となく、自宅から3キロ離れたカトリック教会に出かけ、祈りの時を持っていると話してくれました。彼女は信仰によって支えられているのです。

自分があれほどまでの苦難を得なければならなかった理由を、彼女は信仰的によどのように理解しているのでしょうか？私はまだこれらのことを尋ねたことがあ

りませんから、彼女がどう考えているのか分かりません。今私が言えることは、彼女が、その不幸の極みとも言える体験にもかかわらず、信仰を失わずに祈り続けてきたということ、それが、紛れもない事実なのだということです。襲撃者たちの凄惨極まりない暴力は、彼女の体のみならず心をも切り刻んだに違いありません。にもかかわらず、彼女は、神との交わりの中で、癒しへの道を歩み続けているのです。

カトリックの神学者、ロバート・シュレーターは、『和解のミニストリー』という著書で以下のように述べています。

「神は、和解の働きを被害者の生の只中で始められる。...加害者が被害者から奪い取ろう、あるいは破壊しようとした人間性 (humanity) を回復することから始められるのである。...和解を経験するとは、命を与えてくださる神との交わりの中で、傷ついた人間性の回復という、神の恵みを経験することなのだ。」

16年前、彼女の人間性は完全に否定され、踏みにじられました。彼女が加害者たちから受けた仕打ちを考えると、癒されるなどということがあり得るのだろうかとも思ってしまう。しかし、彼女は加害者たちと人間的に言葉を交わせるまでになり、祈りのうちに平安を得ていると語るのです。そして今、神が彼女を愛しておられること、彼女の人生の只中におられることを力強く証言しているのです。

これから数ヶ月の間、タデヨさんたちによる家造りが続きます。サベリアナさんとタデヨさんたちの間に和解が実現するかどうか、私は決して楽観しているわけではありません。彼女に赦しを強いるようなことがあってはなりませんし、赦しと和解はプロセスであり、いつ完結するというものでもないはずですが、私には彼らを見守ることしかできませんが、「御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」てくださったイエス・キ

リストが（新約聖書エフェソの手紙2章14節）、サベリアナさんとタデヨさんたちの真ん中にいてくださるよう祈り続けたいと思います。「はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（新約聖書マタイによる福音書18章19から20節に記されているキリストの言葉）



【サベリアナさんと元受刑者たちと基礎工事の現場で】

■光と闇を見据えながら

前号でお伝えしたように、7年ぶりの大統領選挙が8月9日に実施される予定です。選挙前のルワンダに暮らしながら、今、いろいろなことを考えさせられています。ルワンダは、カガメ大統領の強力なリーダーシップのもと、目覚ましい経済成長を続け、大虐殺の後、僅か十数年で「奇蹟の復興」を遂げた国として賞賛されてきました。しかし、一部の富裕層と大多数の貧困層の間の格差は拡大の一途をたどっています。また、政権批判につながる言論が極度に制限されているなど、この国の発展の形は手放しで喜べるものではありません。

選挙が近づくにつれ、こここのところ現政権の強権的な体質が顕著になっています。国際人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチの現地代表の実質的な追放、政

府に批判的な新聞2誌の発刊停止、大統領選に出馬の意志を表明している女性政治家の逮捕（現在保釈中）、さらには、その女性政治家の弁護のために入国したアメリカ人弁護士の逮捕など、現政権に批判的な言論を力づくで封じ込めようとする動きが強まっているのです。選挙まで2ヶ月を切った今、民主化推進を掲げる3つの新政党（うち2つは未公認）による大統領候補擁立の動きは阻まれたままです。

現状をただ「アフリカン・ドリーム」としてもはやすのではなく、この国の光と闇をしっかりと見据え、長期的な視野で人々の平和と和解への歩みを支援していくことが求められています。

■家族の近況

萌：膝の靭帯の手術は成功し、リハビリを続けています。9月から始まる日本での大学生活を楽しみにしています。

仁：親には反対されていますが、ルワンダでバイク免許の取得を画策中です。

共喜：夏休みに入り、朝は日本語の読み書きの特訓、昼はテニスに励んでいます。

恵：毎朝約1時間のウオーキングを始め心も体もスッキリしてきました。

和之：週末は家庭菜園で気分転換。大根、白菜、小松菜、チンゲン菜、ゴボウ、水菜、分葱、ニラ、コリアンダーと、どれもよく育ちます。

私たちは、7月中旬にケニアで萌の卒業式に参加した後、イギリス経由で8月に一時帰国します。家族揃っての帰国は10年ぶりのことですので、皆とても楽しみにしています。

私たち一家のために御加禱下さい。

折り紙・絵本・ふれあい

佐々木 恵

ささきめぐみ

ここルワンダの未来を担う子どもたちと
共にいられることに、感謝しています。

■子どもたちとの触れ合い

早いもので、ピース・インターナショナル・スクール (PIS) で折り紙教室をするようになって、4年以上が過ぎました。キガリ市内の都市開発にともなって、学校の立ち退き問題が浮上し、一時はこの学校がどうなることかと危ぶまれたこともありましたが、いまでは、新しい土地に学校建設もはじまり、おもいがけない展開を見せています。

新しい校舎は、キガリから2時間ほど北西にあるニャンザという町に建設がはじまりました。旧都ブタレに向う街道沿いの斜面が切り開かれ、既に基礎工事が終了しています。土地購入に当っては、デニスさんの日本の友人やバプテスト女性連合からの寄付金があてられ、学校建設は、日本大使館の草の根無償資金の申請が受け入れられたことで実現したのでした。新しい学校の開校は、まだしばらく先のことになりますが、これから、この学校との関係も新しい局面に入っていくことだろうと期待しています。



【基礎工事が完了しました！】

さて、折り紙教室の新しい活動として、

先月から絵本の読み聞かせをはじめました。「はらぺこあおむし」、「てぶくろ」、「もりのなか」、「わたしとあそんで」など、日本でも良く知られている絵本をわたしが英語で読み、ダティヴァさん（校長夫人）がルワンダ語になおして聞かせるという方法で読み聞かせをしています。ところどころ、私がルワンダ語に訳せる簡単などころはそのままルワンダ語で読んでいます。



先週は、ルワンダ語の家庭教師ピーターに、日本の知人が送ってくださったデズモンド・ツツ大主教の「かみさまのゆめ」という本を訳してもらい、何度も読み方を練習して折り紙教室に臨みました。ところが学校に行ってみると、連絡の手違いで7人の生徒しか集まっていませんでした。通常は40人ほどの子どもたちが集まるのです。そのうえ、通訳としてあてにしているデニスさんご夫妻も新しい学校の建設現場に出掛けていて留守・・・でも子どもたちは、「絵本を持ってきた？」と、私のバッグの中をのぞき込むほど、とても楽しみにして待っていてくれ

たのでした。ルワンダ語には、鼻に抜けるとても難しい発音があるので、ピーターに教えてもらったルワンダ語訳を書いた紙を読みながらの不安な読み聞かせでしたが、「私のルワンダ語が解る?」と聞くと、しっかりうなずいてくれるのでした。

私はこの日、折り紙を教えたり、一緒に歌ったり、絵本を読んでやったりすること、この学校で子どもたちの間に座りながら、同じ時間を過ごしていることにとても居心地の良さと幸せを感じました。「手を叩きましょう」を歌うと、笑い顔、泣き顔、怒り顔をつくりながら、表情たっぷりに歌ってくれます。(写真をご覧ください!)「先生とお友だち」を歌うと、

とても嬉しそうに握手をしてくれます。その反応の一つ一つに励まされながら、ここルワンダの未来を担う子どもたちと共にいられることに、今、とても感謝しています。



●事務局からお知らせ

新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

(’10年2月1日～)

伊藤 倭、鈴木悦子、鈴木道子、宮脇勝男、学校法人 横浜英和学院、五嶋明子、福岡城西キリスト教会、吉田圭子、鹿児島加治屋町教会(代表役員飯田輝明)、山崎祥子、沖縄バプテスト連盟女性会、松嶋尋美、捜真女学校(醍醐様)、聖学院小学校児童会宗教部、水戸部博美、啓明学園 中学・高等学校 宗教教育部、平林 稔、旭川バプテスト教会 エステル会

以上(敬称略・献金年月日順)

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。
- なお、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。洋光台教会・蛭川まで。(電話045-774-9861)
- 佐々木さんを支援する会HP(ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。
佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、
村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)